

以上が、現在までの調査で明らかになったことである。

今後は、ダンス・クラスを受講する人々の、より詳細なパーソナル・データの聞き取りを行う。加えて、参加動機などについても同様に聞き取りを行う。また、名古屋近郊で行われているイベントやワークショップにも参加し、参加者やその様子について観察を行う。文献による調査も併せて行っていく。

注

1) 「アフリカン・ダンス」と言っても、アフリカには数多くのそれらが存在しており、一言で述べられるものではない。だが、この報告においては、現在筆者が調査対象とし、フィールドワークを行っているダンス・クラスで踊られているダンスを、「アフリカン・ダンス」と定義する。それは、西アフリカ、主にセネガル・ギニア・マリで踊られているものである。

西アフリカの「伝統的」なダンスの特徴は、基本姿勢が一般的にコラップス（屈曲姿勢）と呼ばれるもので、膝と腰を軽く曲げ、胸が自然に地面と向き合うような形になるものが多い。また、身体の各部分を独立させて動かすアイソレーションというテクニックを使い、一人でポリリズムを表現するような動きが見られる [柳田 2000 : p. 28]。

2) 「アフリカン・ドラム」もダンスと同様である。このダンス・クラスで踊る際に使用されているものを指すことにする。それは、「ジェンベ (Djembe)」と呼ばれる西アフリカが起源とされる太鼓である。これは、マホガニーなどの1本の木をくり抜いた胴に、ヤギの皮を張ったワイングラスのような形をした太鼓で、素手で叩くものである。

他に、ベースになるリズムを叩くために「ドゥンドゥン (Doundoun)」と呼ばれる太鼓も使用される。これは、円柱にくり抜いた木の両端にヤギの皮を張ったものであり、パチを持って叩く。基本的に、「ドゥンドゥン」は、同型で大きさが若干小さい「サンバン (Samban)」とさらに小さい「ケンケニ (Kenkeni)」の3台で演奏される。

3) ダンス・クラスとして定期的に行われているのは1つのみである。しかし不定期で行われるクラスや、個人的にダンスとドラムのグループを作り、活動している人々も多くいる。

4) 但し、2006年7月初旬から9月中旬までは、セネガル首都ダカールにて現地調査を行っていたため、参加していない。

5) Hip Hop やレゲエなどは、西アフリカの音楽がルーツであるとされる。他に、ハウスを踊っていた人が「アフリカン・ダンス」も始めるパターンをしばしば見聞きする。

引用文献

柳田知子 2000 『アフリカの太鼓で踊ろう 西アフリカのジンベとダンス』音楽之友社

伝世戦国貨幣調査の意義

飯田祥子・橋本明子

東洋史学専門 後期課程3年

1970年代以降の中国では、考古学的な調査により、重要な遺跡や遺物の発見が相次いでいる。考古学界の関心が先史時代に偏ってきた日本とは異なり、中国においては文献史料が残る歴史時代に関しても考古学的資料を用いて相互補完的に研究することが常識となっており、それは日本の中国研究者にとっても同じである。

特に中国戦国時代（前403～222年等諸説あり）に関しては、最も信用に値するとされる司馬遷『史記』ですら紀元前一世紀に編纂されたものであり、年代的には300年から100年程度離れている、各国の年代記の断片をもとに編纂・再構成させたものであるなどの理由により、容易に依拠すべきではない点も存在する。それゆえ戦国時代研究にとって、一次資料もしくはそれにより近い出土文字資料の重要性は非常に大きく、出土資料を無視した研究は成り立たないと言って

も過言ではない。

現に1980年代以降、出土文字資料の中でも簡牘帛書をもとに法律、制度、思想、医学、社会等の分野で、従来の文献史料に依拠しては探求しえないほど詳細な研究が進められており、膨大な研究成果が発表され続けている。

しかし、このような現状に問題がないわけではない。そもそも出土文字資料が考古遺物である以上、付随する考古学的なデータと総合的に検討されるべきである。それにもかかわらず、残念ながら中国考古学界の現状は十分な情報を広く公開できる状態ではなく、まして外国人研究者にとって遺物自体を実見するなどの機会は非常に少ない。中国の研究者の報告した整理済みの資料のみに依拠してしまう危険性を否定できない。

また、新鮮で重要な新資料の発見により、学界の注目がそれに集中し、冷静な議論がおざりにされがち

である。特に、偶然発見された興味深い資料の裏に、発見されえない膨大な量の資料が存在していたであろうことを、考慮に入れていないかのような研究も少なくはないのである。

このような出土文字資料を利用した中国古代史研究をめぐる状況の下、改めて日本国内に古くから収蔵されている中国古代の遺物に注目することの意義は大きい。特に青銅器の国内のコレクションは世界的にみても質・量ともにレベルが高く、このような実物資料に恵まれていたことが、日本の青銅器・殷周史研究を支えていたとみることもできよう。

さて、中国古代の青銅貨幣についても、日本の伝世コレクションは膨大なものである。しかし、その圧倒的多数は企業や個人に収集されており、必ずしも中国古代貨幣の重要性が理解されておらず、標本や骨董品のように扱われ、歴史学の資料として十分な研究がなされているとはいいがたい。伝世の資料は、発掘によるものと異なり、出土地や出土状況が不明なことが多く年代の特定も困難であるという難も存在する。しかし、中国において新たに発見される貨幣の多くも窖藏であり、出土状況から年代を判断する困難には違いはない。むしろ、研究者がコレクションすべてを落ち着いて手に触れて詳細に観察できるという条件を利用して、従来の報告では見過ごされてきた細かな情報を漏らさずに集めることが可能であるという利点を考慮すれば、国内の膨大な貨幣コレクションを中国古代貨幣の専門家が調査を行い、そのデータを整理することの意味は大きい。

その意義のもとに、今回は国内屈指の中国古代貨幣の所蔵を持つ東京大学経済学部図書館資料室、泉屋博古館所蔵等の貨幣をデータベース化する作業を行った。

東京大学経済学部図書館資料室では、すでに個々の貨幣のサイズや重量などの計測データが作られていたが、欠損やさびの有無などを実物と対照させつつ一度に確認することができず、史料としての利用には、不十分な状態であった。そこで今回は、実物の形状とともにそれを確認できる状態での整理をめざし、貨幣の種類やサイズなどからも検索が可能なデータベースの作成を行った。

中国戦国時期の貨幣には、大きく分けて布銭・刀銭・円銭の3種があり、それぞれの貨幣の表裏に数字程度の文字が鋳込まれている。作業としては、まず、個々の貨幣1枚ごとの表裏の写真撮影及び文字の模写を行い、一点ごとにサイズや重量、表裏の文字の釈読

などのデータを付し、カード化していくという作業を行った。

現在もまだ作業の途中ではあるが、その中でもいくつかの点を確認することができる。例えば、齊大刀には貨幣の周囲に明瞭な周郭が認められるが、その中でも「即墨之法化」・「安陽之法化」などの文字を持つものには、周郭の背の身と柄の間が断絶しており、それが刀銭の起源である削刀と呼ばれる小刀の形質を残すものであり（江村治樹「中国における古代青銅貨幣の生成と展開(四)——齊大刀のテキストとしての特性——」『SITES 統合テキスト科学研究』4-2, 2006）、その断絶の有無が刀銭の先発・後発関係を分別する指標となっている。東京大学経済学部図書館蔵の貨幣にも、「即墨之法化」「安陽之法化」の銘をもつ齊刀があるが、それらの幾つかにも周郭の断絶を確認することができる。

また、貨幣の発行主体についても様々に疑問がなされており、特に中国では貨幣の表面に鋳込まれた地名から、その地を領有する国家がその貨幣を発行したと考えるのが主流となっているが、現実には、同一地域から数種類の形態の貨幣が出土し、また同じ地名を示す銘文の字体が複数存在しているなど、貨幣の発行に対して国家の統制を想定しにくいという見解も存在している（江村治樹「中国における古代青銅貨幣の生成と展開(附論)——テキストとしての貨幣の形態に関する覚書——」『SITES 統合テキスト科学研究』4-2, 2006)。東大経済学部所蔵の方足布には、「滋氏」「平陽」などの銘をもつものがあるが、やはりその字体には2種以上のものを確認することができ、国家による統一的な貨幣発行が行われたとは考えにくいように思われる。

東大経済学部図書館資料室作成のデータには、発行国についても記述があるが、上述した様に、発行国は銘文や出土地のみでは決定できず、それ以外の当時の状況についても十分に検討を行って推定する必要がある。伝世コレクションであるこれらの史料について、早急な推定を行うのは危険であり、今後とも様々なデータとの突き合わせが必要であろう。

現段階としてはまだ東京大学データの整理途中であり、今後の作業の進行と共にこれまでとは異なった傾向が確認される可能性も存在する。さらに中国貨幣の全体的なデータとの対照が必要であると思われる。